

■発刊に寄せて

1964年の東京オリンピックのメイン会場をはじめ、およそ半世紀に渡って日本のスポーツの聖地として多くの名勝負の舞台となってきた国立競技場。

日本で開催される2019年ラグビーワールドカップや招致を目指す2020年オリンピック・パラリンピックのメインスタジアムと位置づけられることを踏まえ、国立競技場の将来構想について審議する「国立競技場将来構想有識者会議」(佐藤禎一委員長)が2012年、日本スポーツ振興センターに設置された。

新しい競技場は、オリンピックはもとより、球技・陸上などの大規模な国際大会開催を可能とし、また、文化・スポーツの拠点となるよう、次世代型スタジアムとして、世界に誇れる新スタジアムの創造を期待し、広く世界からデザイン案を募集するための国際デザイン・コンクールを実施することとなった。

応募期間は短期間であったが、ヨーロッパ、アメリカ、アジアをはじめ世界中から46点ものすばらしいデザインが集まった。短い期間の中、多くの応募をいただいたことに深く感謝している。

審査は、建築家安藤忠雄氏を委員長とする「新国立競技場基本構想国際デザイン競技審査委員会」において、最優秀、優秀、入選の3作品を選出し、2012年11月15日に開催した「国立競技場将来構想有識者会議」において受賞が決定した。

最優秀賞に選ばれたザハ・ハディド氏の作品は、スポーツの躍動感を思わせる流線型の斬新なデザインであり、その圧倒的な造形性は高い評価を得たが、何より「世界に日本の先進性を発信し、優れた建築環境技術をアピールできるデザイン」であることが決め手となり、新しい時代の幕開けにふさわしいものであると確信している。

新しい国立競技場は、「未来に向けたメッセージ」である。世界でいちばん行きたくなるようなスタジアムを日本人みんなで創る。スポーツの力で世の中をもっと良くするために。

「ここから未来がはじまる」

最後になるが、本デザイン・コンクールに携わっていただいた多くの方々に感謝したい。

独立行政法人日本スポーツ振興センター
理事長 河野 一郎

